

風水害の知識—台風と集中豪雨

愛知県では、台風や集中豪雨によるさまざまな被害が起きています。ここでは、台風情報の見方や、警報と注意報の種類など、基本的な知識についてまとめてみました。

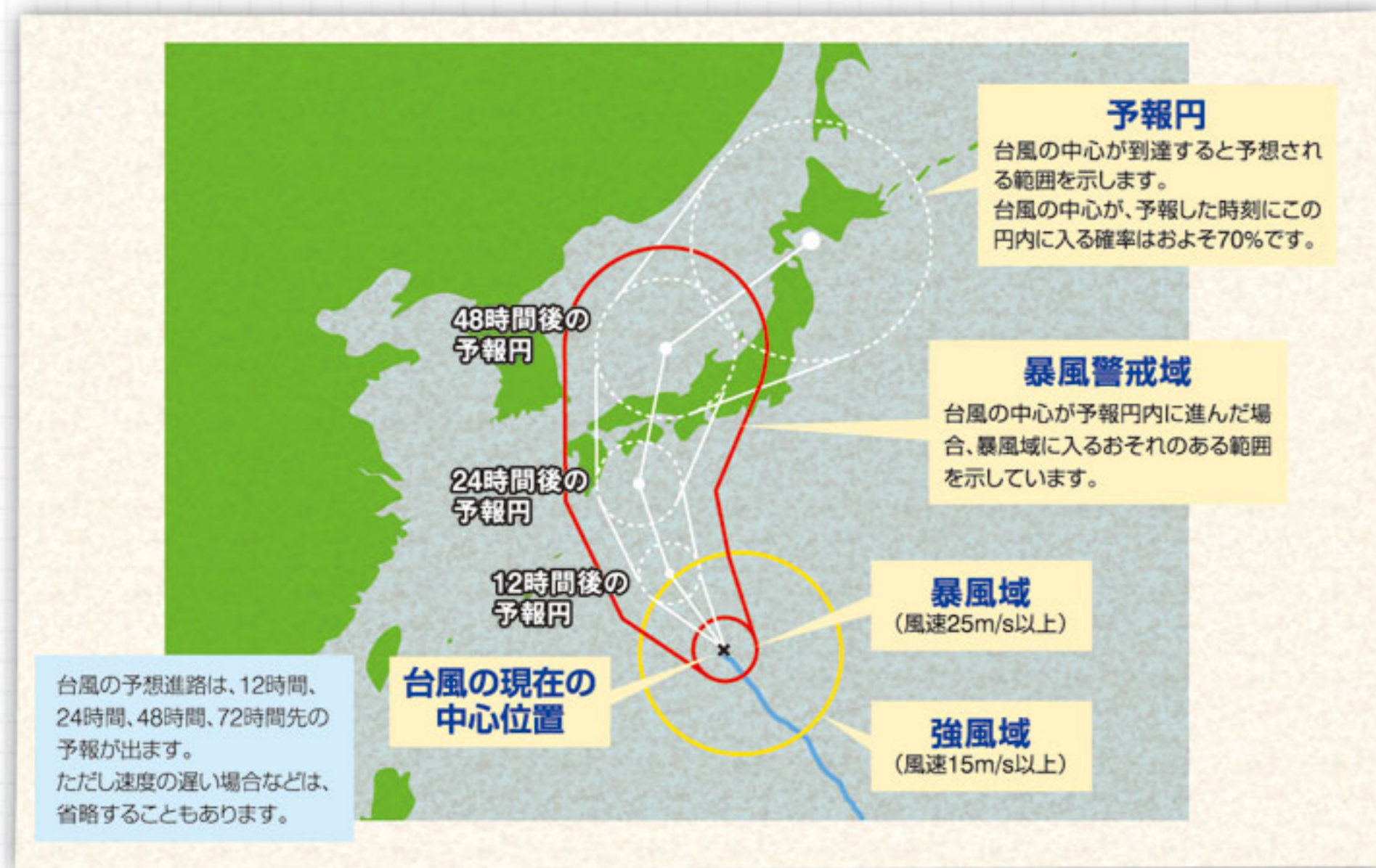
台風とは

熱帯の海上で発生する低気圧を「熱帯低気圧」と呼びますが、このうち中心付近の最大風速が17.2m/s(34ノット、風力8)以上になったものを「台風」と呼びます。

愛知県では過去に「伊勢湾台風」などの大きな台風がたびたび上陸しており、大きな被害にあっています。



台風情報の見方



台風の大きさと強さ

気象庁は、台風のおおよその勢力を示す目安として、風速をもとに台風の「大きさ」と「強さ」を表現します。大きさは、強風域(風速15m/s以上)の半径で、強さは最大風速で区分しています。

また強風域の内側で、風速25m/s以上の風が吹いていると予想される範囲を「暴風域」と呼びます。

台風に関する情報では、これらを組み合わせて「大型で強い台風」のように呼びます。

台風の大きさ

階級	風速15m/s以上の強風域の半径
大型(大きい)	500km以上~800km未満
超大型(非常に大きい)	800km以上

台風の強さ

階級	最大風速
強い	33m/s以上~44m/s未満
非常に強い	44m/s以上~54m/s未満
猛烈な	54m/s以上

集中豪雨とは

集中豪雨とは、狭い範囲に比較的短時間に大量の雨が降る現象です。愛知県では、平成12年の東海豪雨や平成20年8月末豪雨など、何度も被害にあっています。

集中豪雨は梅雨の終わりごろや台風シーズンに発生しやすく、河川の氾濫やがけ崩れなどで大きな被害が出ることもあるので、十分な注意が必要です。

1時間の雨の量と降り方

10~20mm	ザーザーと降り、雨の音で話し声がよく聞き取れない。
20~30mm	どしゃ降りや側溝や下水、小さな川があふれ、小規模のがけ崩れが始まる。
30~50mm	バケツをひっくり返したように降り、山崩れ・がけ崩れが起きやすくなる。都市では下水管から雨水があふれる。
50~80mm	滝のように降り、都市部では地下室や地下街に雨水が流れ込む場合がある。土石流が起こりやすくなる。
80mm以上	息苦しくなるような圧迫感がある。雨による大規模な災害の発生するおそれが強く、厳重な警戒が必要となる。



愛知県の主な風水害

伊勢湾台風

1959年9月21日にマリアナ諸島の東海上で発生した台風15号は、発生後2日足らずで猛烈な台風に成長し、26日紀伊半島に上陸し、東海地方を中心に大きな被害を及ぼしました。

愛知県では、名古屋や旧弥富町、知多半島などで激しい暴風雨の下、高潮により短時間のうちに大規模な浸水が起こり、死者・行方不明者約3,300名に達する大きな被害となりました。



東海豪雨

2000年9月11~12日、愛知県を中心に東海地方の広範囲にわたって大きな被害をもたらした豪雨災害です。2日間の積算降水量は多いところで600mm前後に上り、名古屋市周辺で多数の浸水被害が生じたほか、広い範囲で河道護岸の損壊、がけ崩れ、土石流などによる災害が発生し、交通網が寸断されて、伊勢湾台風以来の大被害をもたらしました。



昭和47年7月豪雨災害

昭和47年7月3日から全国的に降った大雨は、特に12日夜半から愛知県に大きな被害をもたらしました。矢作川沿いの三河地方では、先行降雨で地盤がゆるんでいたこともあり、山・がけ崩れが起こり、旧小原村の31名をはじめ、豊田市、旧藤岡村、旧足助町などで死者64名、行方不明者4名の犠牲者を出す大災害となりました。

